２－４　危機管理対策

（１）浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度

問　水道局では、震災や事故などに備えて、浄水場の耐震化や水道管の耐震強化（※1）、管路のネットワーク化（※2）などを進めています。

この取組について、ご存知ですか。

※1　耐震性の低い水道管を耐震性の高い管に取り替えています。

※2　震災等により水道管路に異常があった場合でも、断水・濁水を最小限に抑えるために、他の系統からの給水を可能にするための管路の整備拡充を図っています。

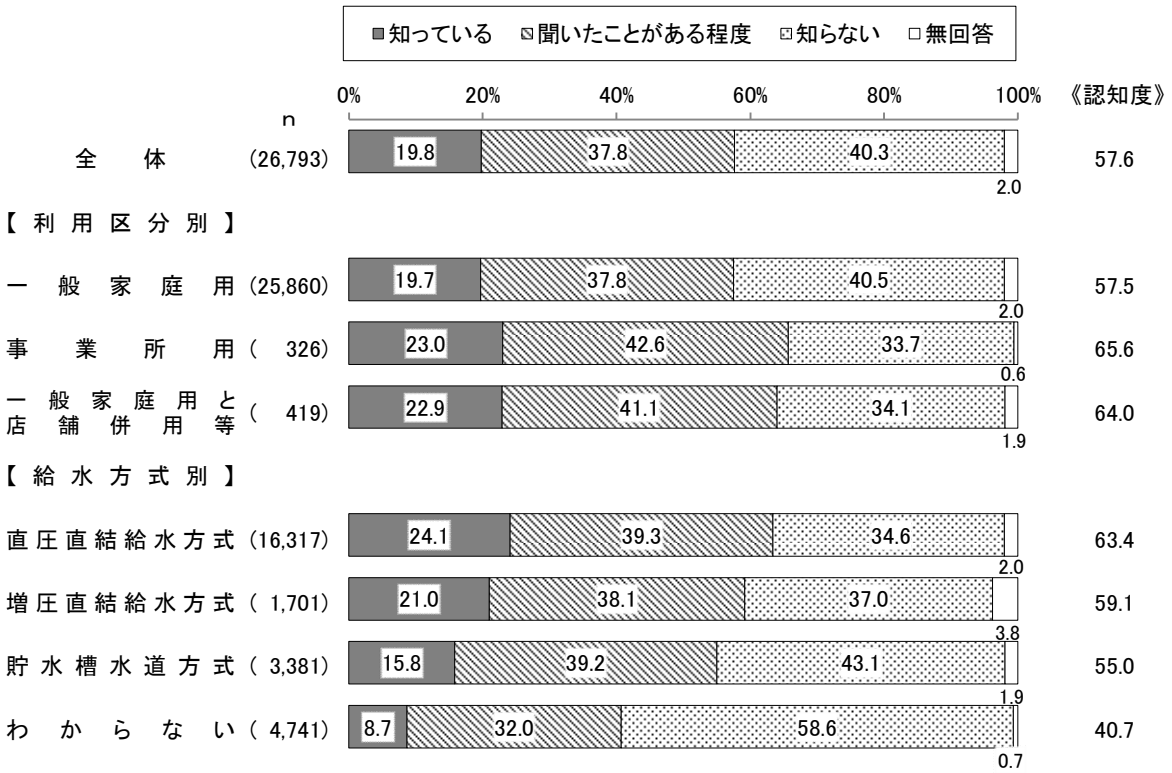
1）知っている　　2）聞いたことがある程度　　3）知らない

〔Ｃ：問 8、Ｇ：問 8〕

［調査結果］

①　浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（利用区分別、給水方式別）

〈図表２－４－１〉



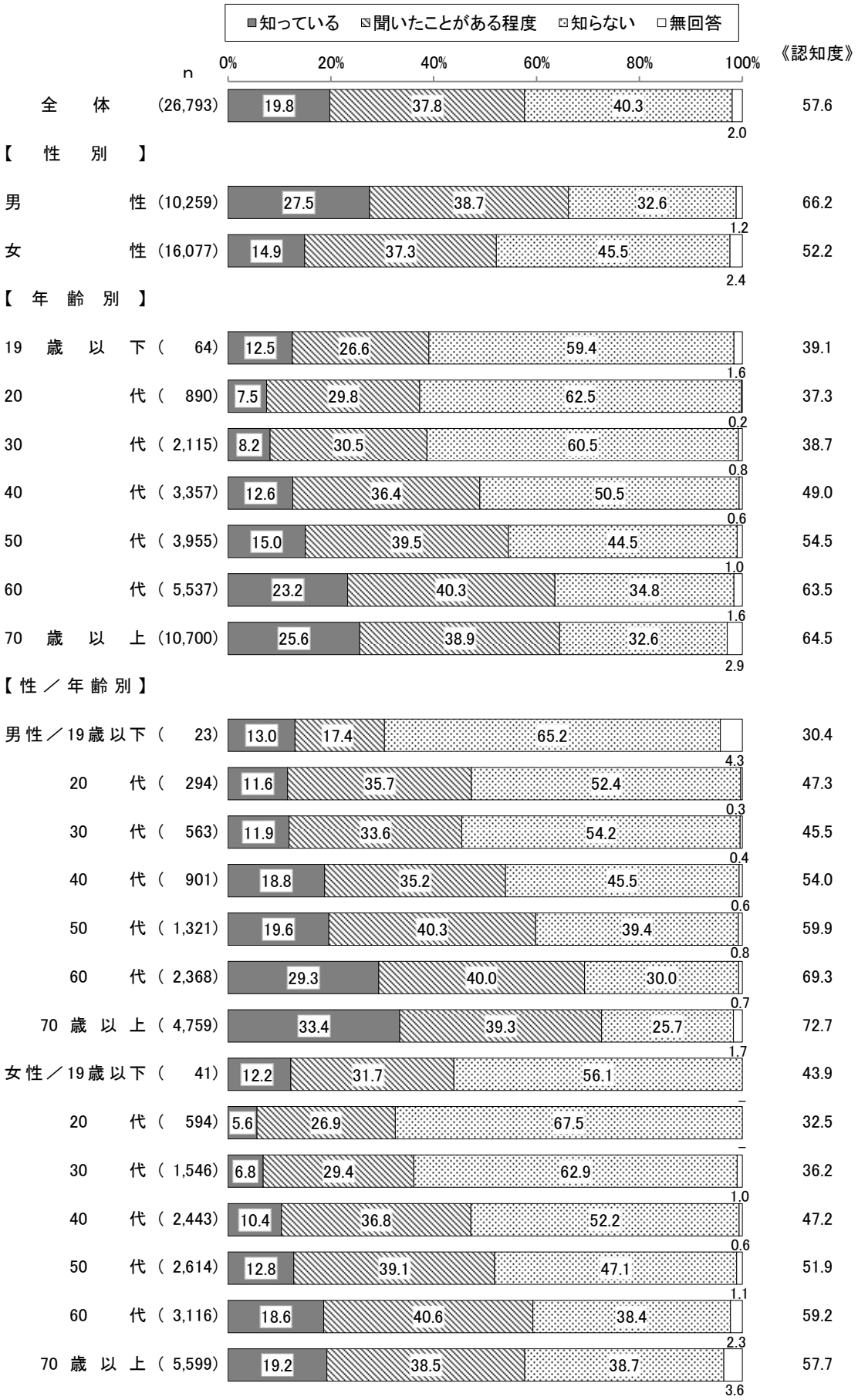
＜特徴＞

○全体では、「知らない」が40.3％で最も高くなっている。「聞いたことがある」（37.8％）と「知っている」（19.8％）を合わせた《認知度》は57.6％となっている。

○利用区分別では、《認知度》は、事業所用で65.6％と最も高くなっている。

○給水方式別では、《認知度》は、直圧直結給水方式で63.4％と最も高くなっている。

② 浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（属性別）〈図表２－４－２〉



＜特徴＞

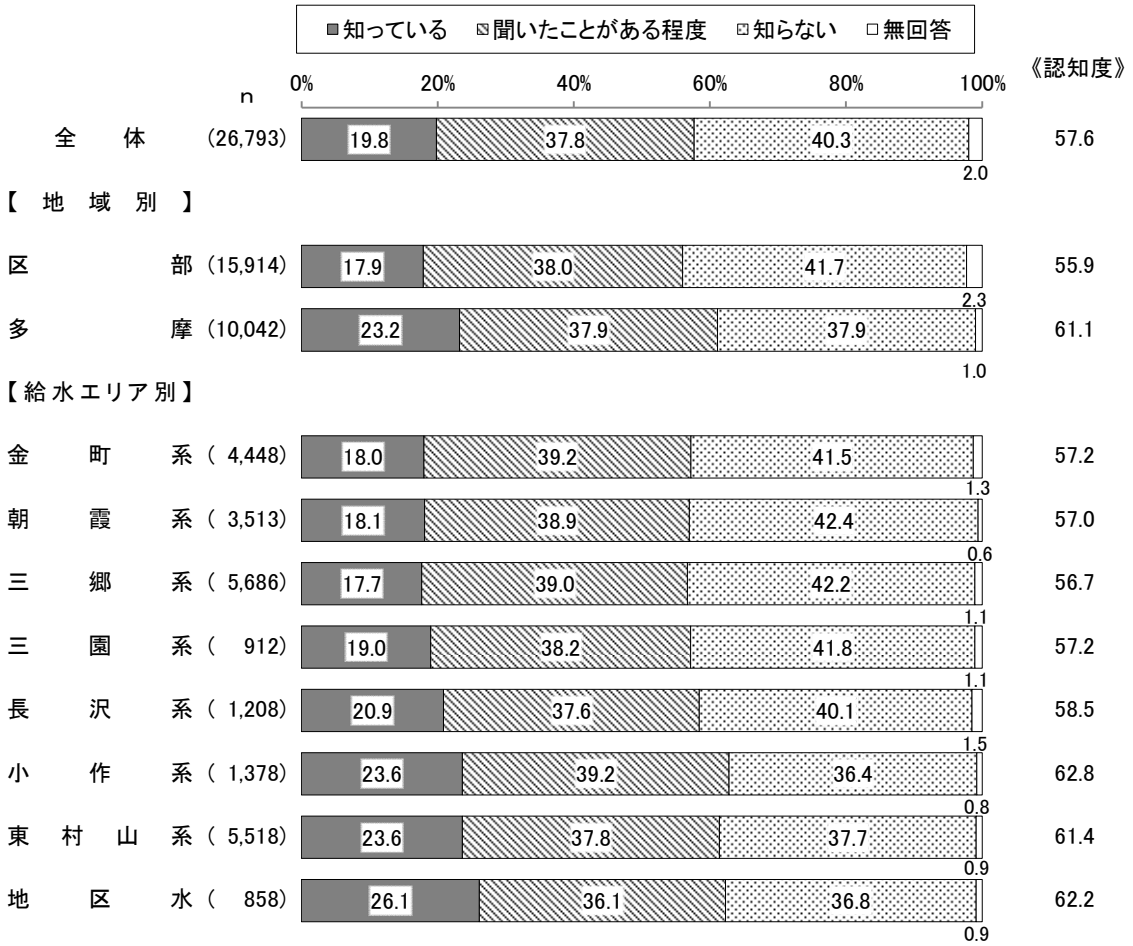
○性別では、《認知度》は、男性（66.2%）の方が女性（52.2%）より14.0ポイント高くなっている。

○年齢別では、《認知度》は、19歳以下から30代にかけては４割近くで推移しているが、40代から年齢が上がるにつれ割合が高くなり、70歳以上（64.5%）で最も高くなっている。

○性／年齢別では、《認知度》は、標本数が少ない19歳以下を除き、男性の70歳以上（72.7%）で最も高く、女性の20代（32.5%）で最も低くなっている。

③　浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（地域別、給水エリア別）

〈図表２－４－３〉

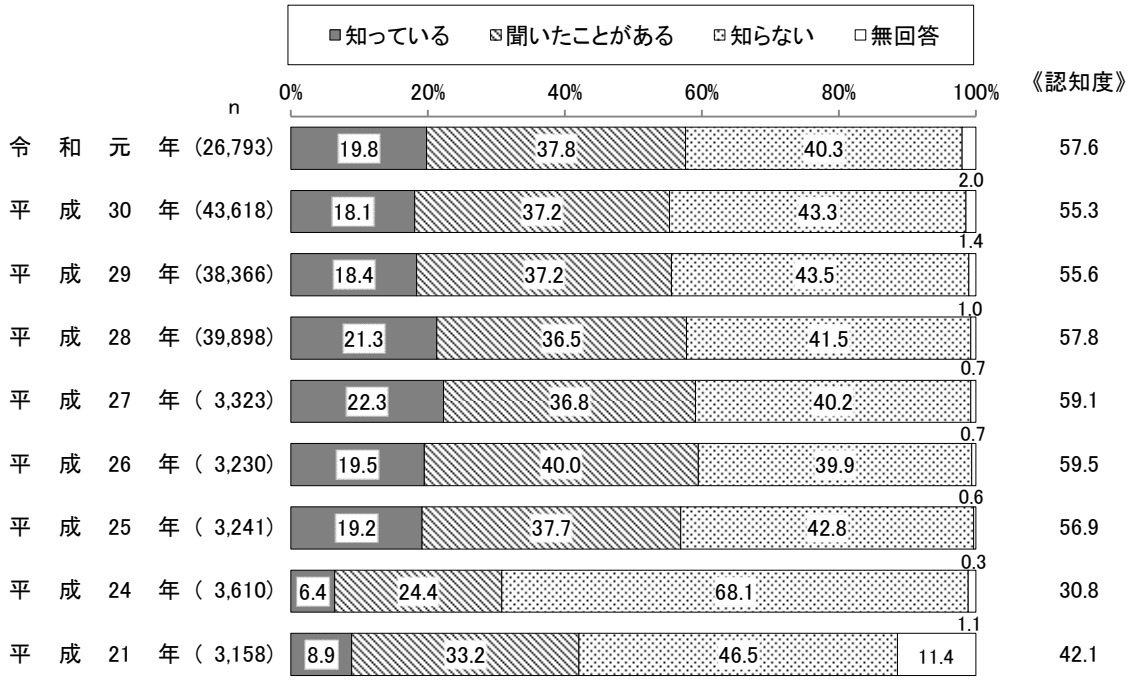


＜特徴＞

○地域別では、「知っている」は多摩（23.2%）の方が区部（17.9%）より5.3ポイント高くなっているが、《認知度》では特に大きな違いはみられない。

○給水エリア別では、《認知度》は、小作系（62.8%）が最も高く、次いで地区水（62.2%）、東村山系（61.4%）などとなっている。

④　浄水場の耐震化や水道管の耐震強化などの取組の認知度（時系列：全体）〈図表２－４－４〉



＜特徴＞

○前年度調査との比較では、《認知度》に特に大きな違いはみられない。

平成27年度から令和元年度までの５年間の傾向でも、《認知度》は特に大きな違いはなく、５割台半ばから６割近くで推移している。

（２）大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度

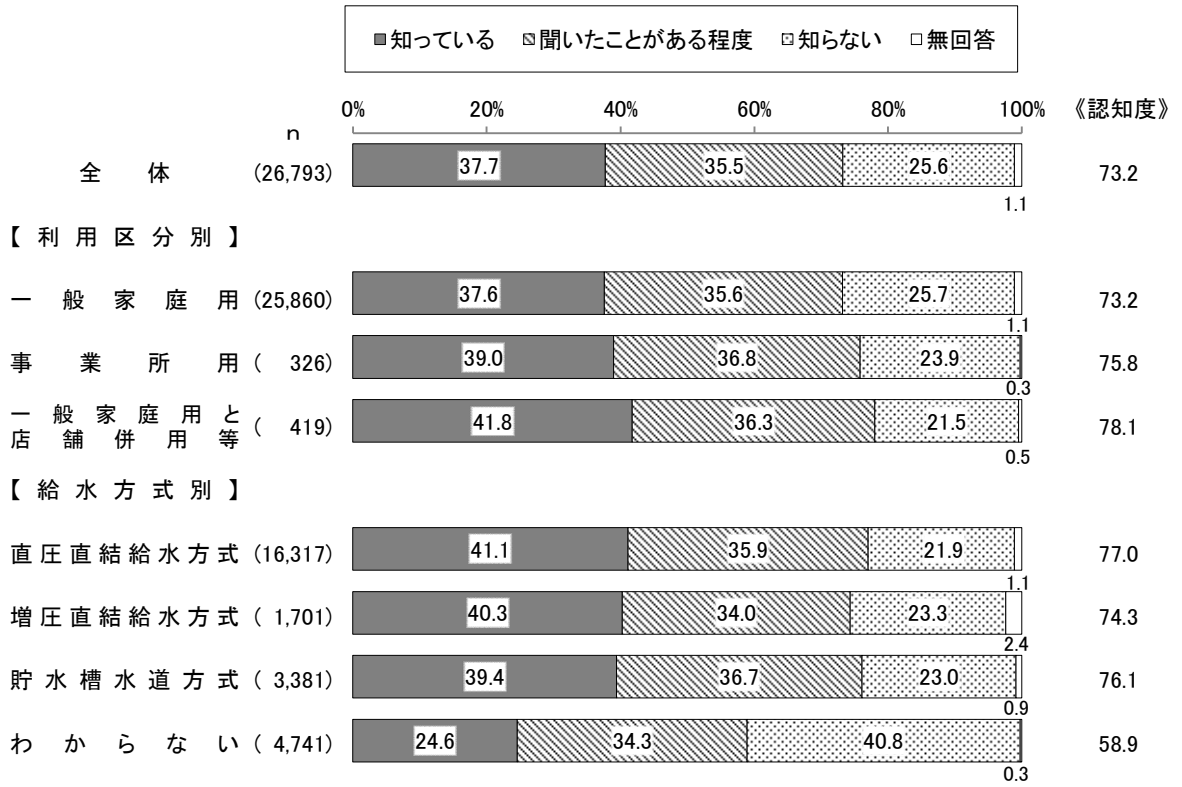
問　東京都の大規模浄水場は、昭和 30 年代後半からの高度経済成長期の需要増に対応するために整備されたものが多く、現在老朽化が進んでいることをご存知ですか。

1）知っている　　2）聞いたことがある程度　　3）知らない

〔Ｃ：問 9、Ｇ：問 9〕

［調査結果］

①　大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（利用区分別、給水方式別）〈図表２－４－５〉



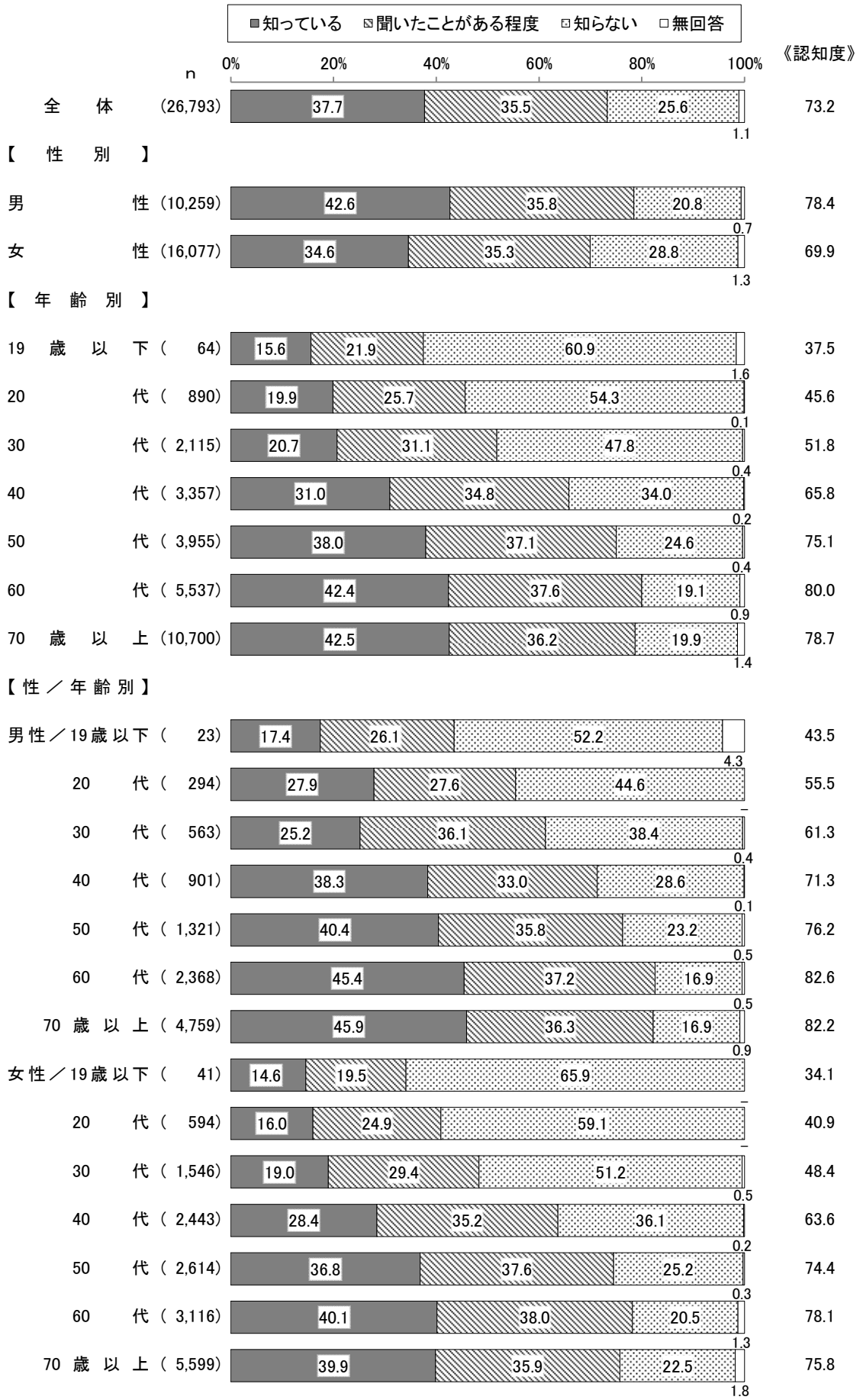
＜特徴＞

○全体では、「知っている」が37.7％で最も高く、「聞いたことがある程度」（35.5％）を合わせた《認知度》は73.2％となっている。

○利用区分別では、《認知度》は、一般家庭用と店舗併用等で78.1％と最も高くなっている。

○給水方式別では、《認知度》は、直圧直結給水方式で77.0％と最も高くなっている。

② 大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（属性別）〈図表２－４－６〉



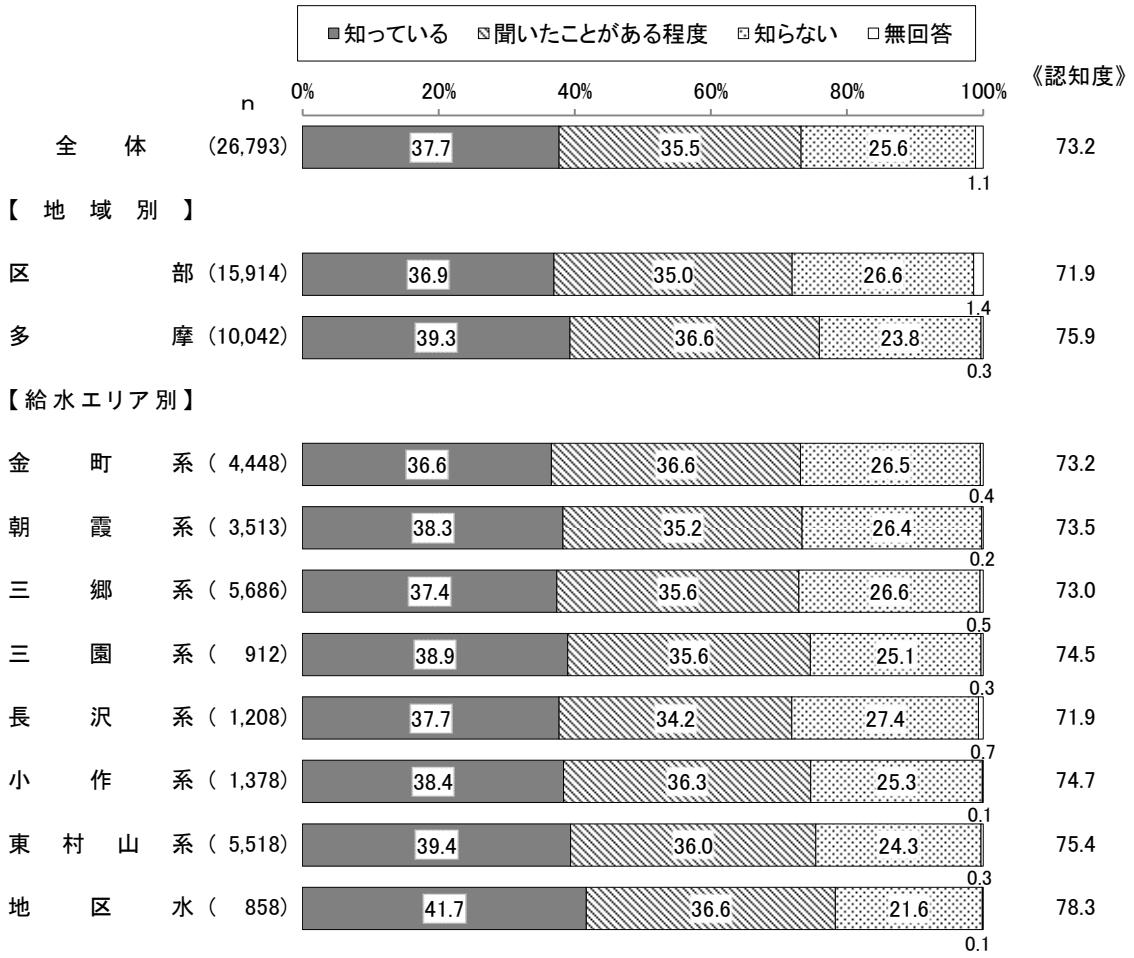
＜特徴＞

○性別では、《認知度》は、男性（78.4%）の方が女性（69.9%）より8.5ポイント高くなっている。

○年齢別では、《認知度》は、19歳以下（37.5%）で最も低く、おおむね年齢が上がるほど割合は高くなり、60代（80.0%）で最も高くなっている。

○性／年齢別では、《認知度》は、男女ともに19歳以下で最も低く、おおむね年齢が上がるほど割合は高くなり、男性の60代（82.6%）で最も高くなっている。

③　大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（地域別、給水エリア別）〈図表２－４－７〉

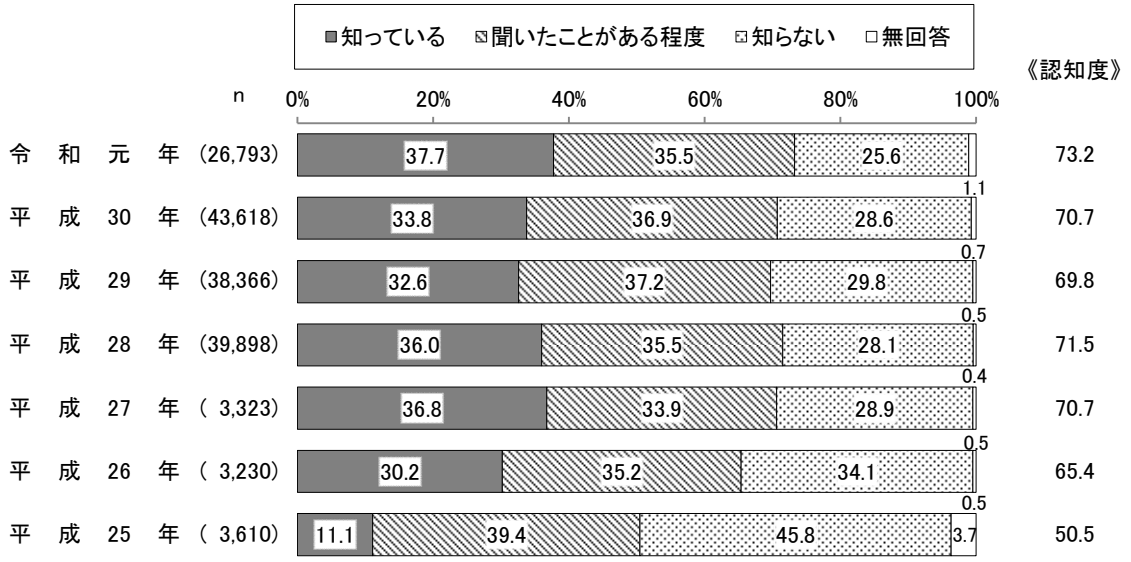


＜特徴＞

○地域別では、《認知度》は多摩（75.9%）の方が区部（71.9%）より4.0ポイント高くなっている。

○給水エリア別では、地区水（78.3%）で最も高くなっている。

④　大規模浄水場の老朽化が進んでいることの認知度（時系列：全体）〈図表２－４－８〉



＜特徴＞

○前年度調査との比較では、「知っている」は平成30年（33.8％）から3.9ポイント増加しているが、《認知度》では特に大きな違いはない。

平成27年度から令和元年度までの５年間の傾向でも、特に大きな違いはなく、《認知度》はおおむね７割前後で推移している。

（３）震災に備えた「飲料水」の確保状況

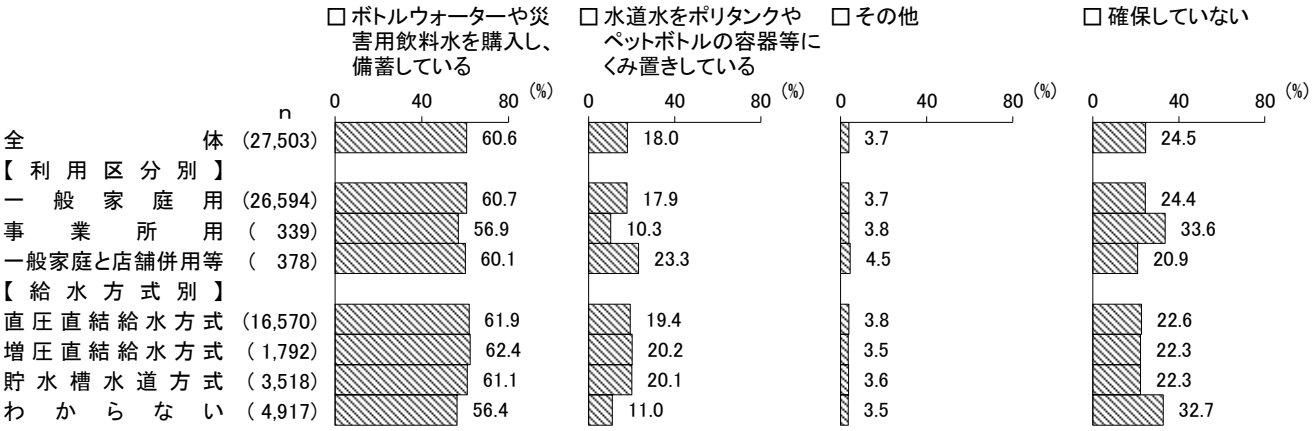
問　日頃から震災等に備えて「飲料水」をどのような方法で確保していますか。（複数回答可）

1）水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている
2）ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している
3）その他
4）確保していない

〔Ａ：問 12、Ｈ：問 10〕

［調査結果］

①　震災に備えた「飲料水」の確保状況（利用区分別、給水方式別）〈図表２－４－９〉



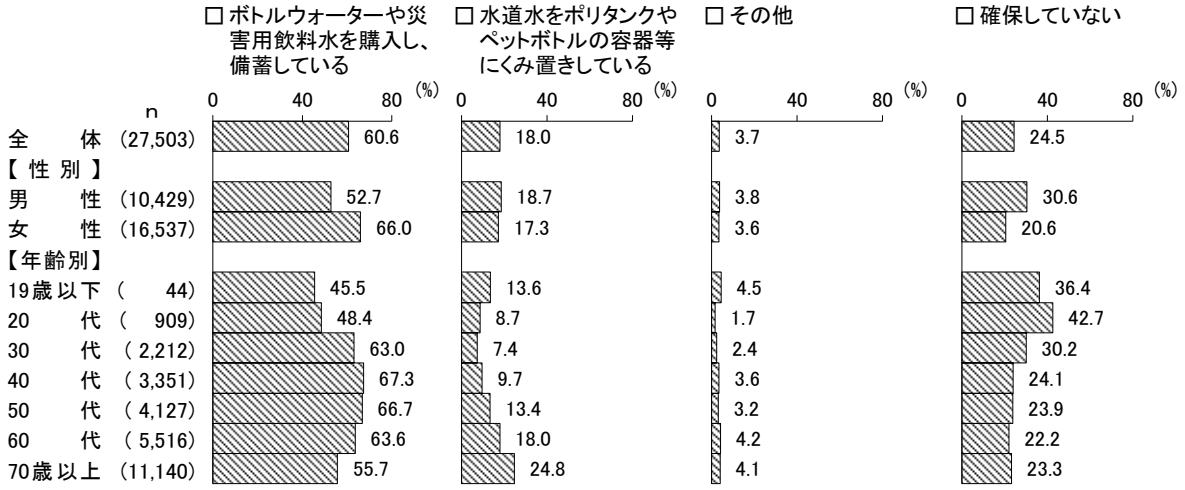
＜特徴＞

○全体では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」が60.6％で最も高く、以下、「確保していない」（24.5％）、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」（18.0％）、「その他」（3.7％）となっている。

○利用区分別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、一般家庭用で60.7％と最も高くなっている。一方、「確保していない」は、事業所用（33.6％）で最も高くなっている。

○給水方式別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、増圧直結給水方式で62.4％と最も高くなっている。

② 震災に備えた「飲料水」の確保状況（性別、年齢別）〈図表２－４－１０〉

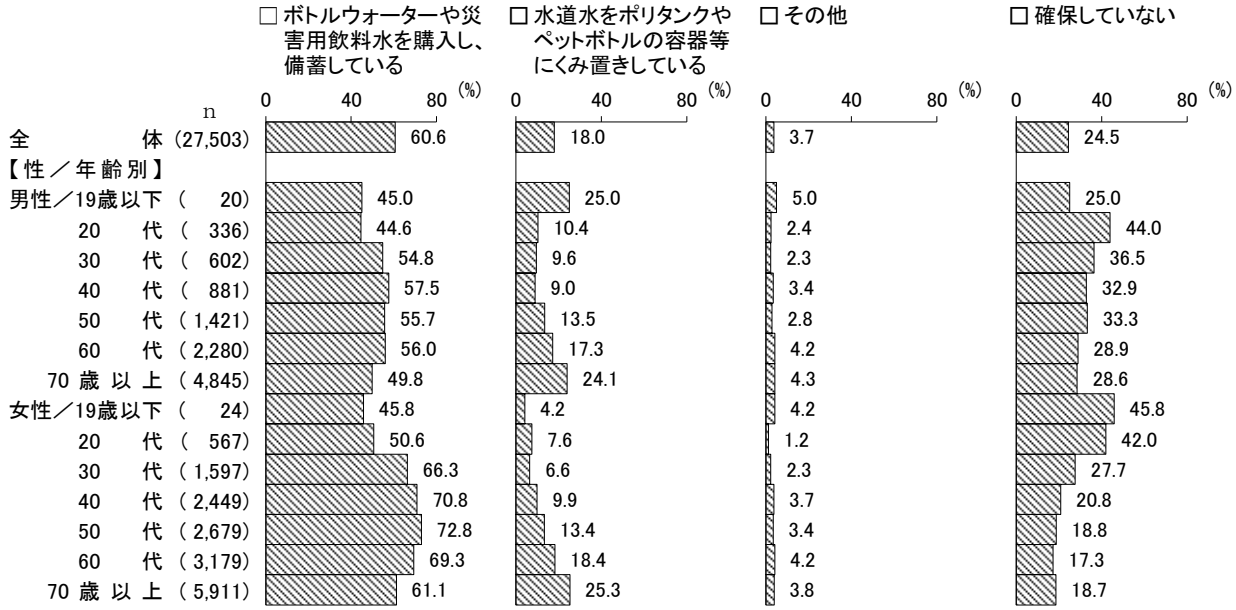


＜特徴＞

○性別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、女性（66.0%）の方が男性（52.7%）より13.3ポイント高くなっている。一方、「確保していない」は、男性（30.6%）の方が女性（20.6%）より10.0ポイント高くなっている。

○年齢別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、40代（67.3%）で最も高くなっている。「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」は、標本数が少ない19歳以下を除き、おおむね年齢が上がるにつれ高くなり、70歳以上（24.8%）で最も高くなっている。一方、「確保していない」は、20代（42.7%）で４割を超え最も高くなっている。

③ 震災に備えた「飲料水」の確保状況（性／年齢別）〈図表２－４－１１〉



＜特徴＞

○性／年齢別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、女性の40代から60代で７割前後と高くなっている。女性では30代以上の全ての年代で６割を超えているが、男性ではどの年代も６割に満たない。

④　震災に備えた「飲料水」の確保状況（地域別、区市町別）〈図表２－４－１２〉

	調査数	水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている	ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している	その他	確保していない	無回答
全体	27,503	18.0	60.6	3.7	24.5	0.6
【地域別】						
区部	16,384	17.9	61.1	3.4	24.1	0.6
多摩	10,250	18.1	60.7	4.0	24.8	0.4
【区市町別】						
千代田区	5	40.0	60.0	－	－	－
中央区	73	24.7	63.0	1.4	23.3	－
港区	218	14.2	68.8	3.2	22.5	－
新宿区	662	16.8	60.3	2.6	26.4	0.6
文京区	144	13.2	73.6	1.4	17.4	0.7
台東区	215	12.6	67.9	3.3	20.9	－
墨田区	136	19.9	52.9	4.4	30.1	0.7
江東区	594	18.7	60.4	3.7	24.4	0.5
品川区	563	15.6	62.9	5.0	23.1	0.7
目黒区	483	15.5	64.8	2.9	23.8	0.2
大田区	1,440	17.3	61.9	2.7	24.1	0.3
世田谷区	1,141	18.1	67.6	4.2	17.5	0.7
渋谷区	388	19.1	60.8	2.6	22.7	0.8
中野区	587	16.4	61.7	3.6	25.0	1.0
杉並区	1,949	15.8	66.0	4.5	21.2	0.4
豊島区	737	17.8	56.6	4.1	28.9	0.3
北区	980	22.3	51.8	3.4	27.7	0.8
荒川区	247	24.7	43.7	3.2	33.6	0.4
板橋区	282	25.5	46.1	3.9	30.9	0.4
練馬区	2,498	17.5	62.8	3.0	23.1	0.7
足立区	1,345	18.0	57.4	3.3	27.7	0.7
葛飾区	1,200	19.6	58.9	3.4	24.8	0.5
江戸川区	497	19.1	60.6	2.6	23.1	1.0
八王子市	1,448	18.4	58.3	4.4	27.3	0.5
立川市	404	15.8	59.2	3.5	26.7	0.2
三鷹市	246	16.7	63.4	3.7	22.4	－
青梅市	590	15.1	50.7	6.9	34.6	0.2
府中市	725	17.2	64.4	2.8	21.9	0.3
調布市	449	16.0	65.5	2.4	23.4	0.2
町田市	1,809	18.6	66.7	3.5	19.3	0.7
小金井市	205	23.9	63.4	1.5	20.5	0.5
小平市	496	20.6	60.9	4.0	24.0	0.4
日野市	276	18.8	60.9	4.0	25.0	－
東村山市	395	22.8	58.0	4.6	23.3	－
国分寺市	199	13.1	66.8	3.5	23.6	－
国立市	180	13.3	53.9	4.4	30.6	1.1
福生市	89	16.9	44.9	7.9	34.8	－
狛江市	268	19.0	66.8	3.0	24.3	－
東大和市	443	18.5	57.1	5.4	26.2	0.5
清瀬市	193	14.0	58.0	4.1	27.5	0.5
東久留米市	256	23.8	57.0	6.3	23.8	0.4
武蔵村山市	239	18.0	54.0	4.6	28.9	－
多摩市	256	12.1	66.8	2.7	22.3	0.4
稲城市	60	16.7	71.7	3.3	15.0	－
あきる野市	344	16.3	50.0	4.4	35.5	0.3
西東京市	506	19.0	62.6	2.2	22.5	0.6
西多摩郡瑞穂町	174	24.1	54.0	5.2	28.7	0.6
西多摩郡日の出町	－	－	－	－	－	－
西多摩郡奥多摩町	－	－	－	－	－	－

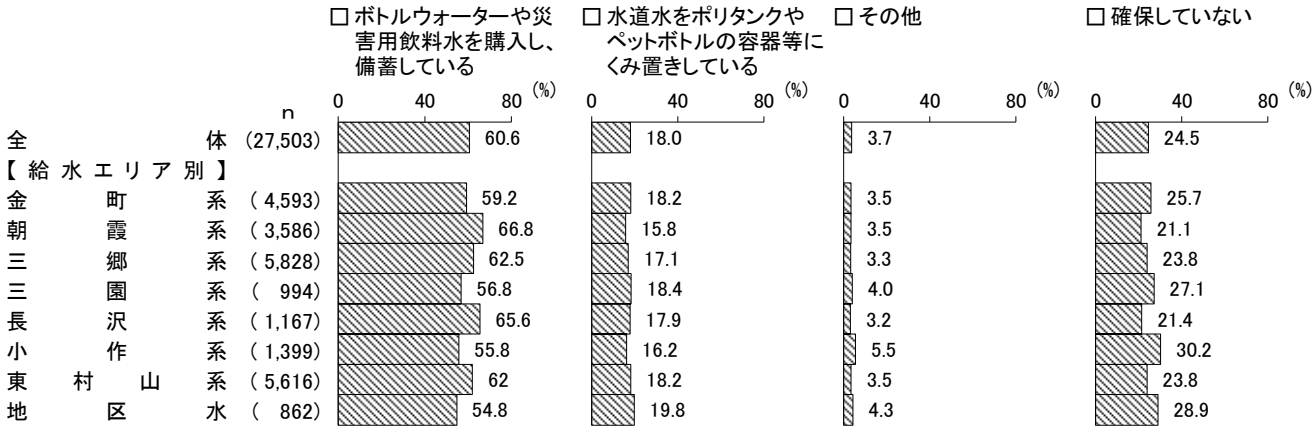
（人）　　（%）

＜特徴＞

○地域別では、区部と多摩の割合に特に大きな違いはみられない。

○区市町別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、文京区（73.6%）が最も高く、次いで稲城市（71.7%）、港区（68.8%）などとなっている。また、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」は、標本数が少ない千代田区を除き、板橋区（25.5%）が最も高く、中央区と荒川区（各24.7%）などとなっている。一方、「確保していない」は、あきる野市（35.5%）が最も高く、次いで福生市（34.8%）、青梅市（34.6%）などとなっている。

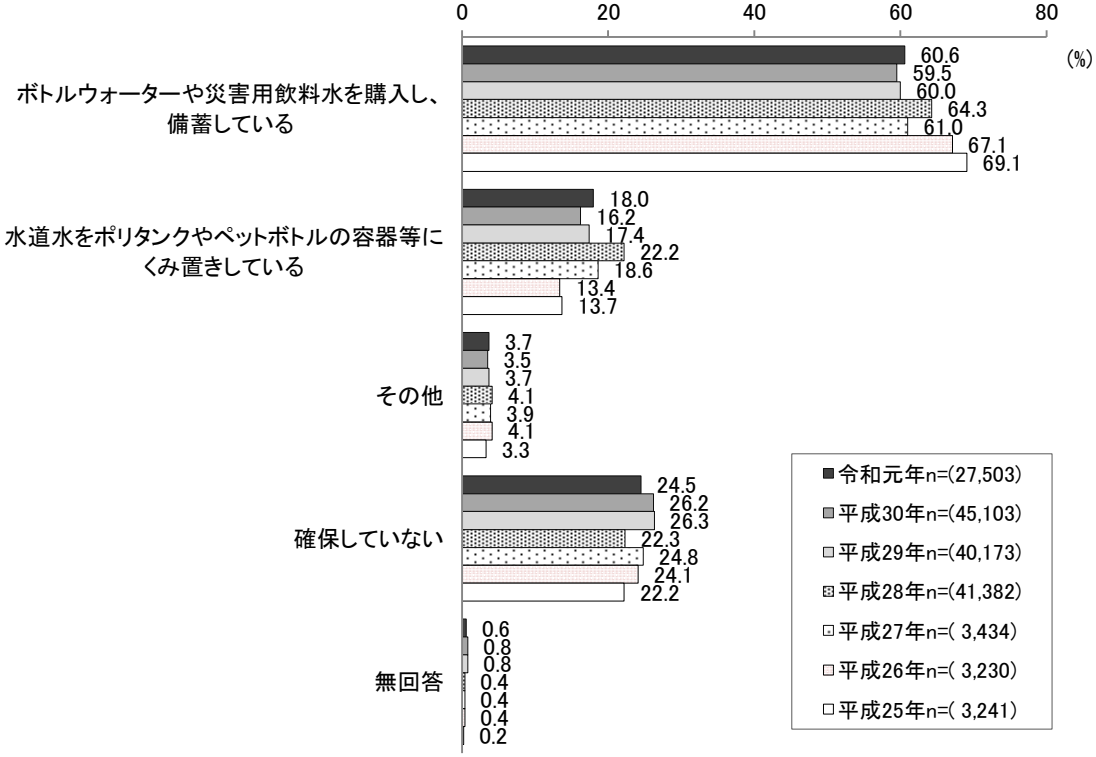
⑤　震災に備えた「飲料水」の確保状況（給水エリア別）〈図表２－４－１３〉



＜特徴＞

○給水エリア別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、朝霞系（66.8%）で最も高く、次いで長沢系（65.6%）となっている。一方、「確保していない」は、小作系（30.2%）で最も高くなっている。

⑥　震災に備えた「飲料水」の確保状況（時系列：全体）〈図表２－４－１４〉



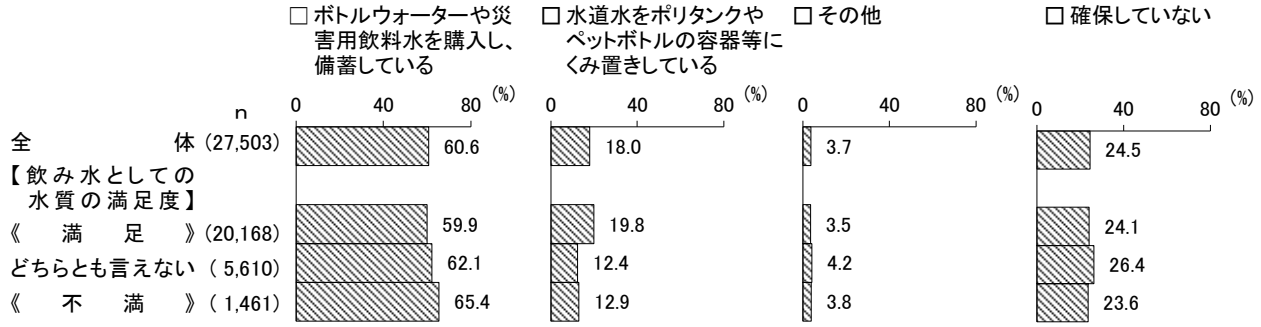
＜特徴＞

○前年度調査との比較では、特に大きな違いはみられない。

平成27年度から令和元年度までの５年間の傾向では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は平成28年度（64.3%）に比べると3.7ポイント減少しているが、この３年間は６割前後で推移している。一方、「確保していない」はおおむね２割半ばで大きな変動なく推移している。

［詳細分析］（分析の軸はＡ票の設問）

⑦　震災に備えた「飲料水」の確保状況（飲み水としての水質の満足度別）〈図表２－４－１５〉



＜特徴＞

○飲み水としての水質の満足度別では、「ボトルウォーターや災害用飲料水を購入し、備蓄している」は、飲み水としての水質に《不満》な人（65.4%）の方が《満足》な人（59.9%）より5.5ポイント高くなっている。一方、「水道水をポリタンクやペットボトルの容器等にくみ置きしている」は、《満足》な人（19.8%）の方が《不満》な人（12.9%）より6.9ポイント高くなっている。

（４）震災に備えて「飲料水」を確保していない理由

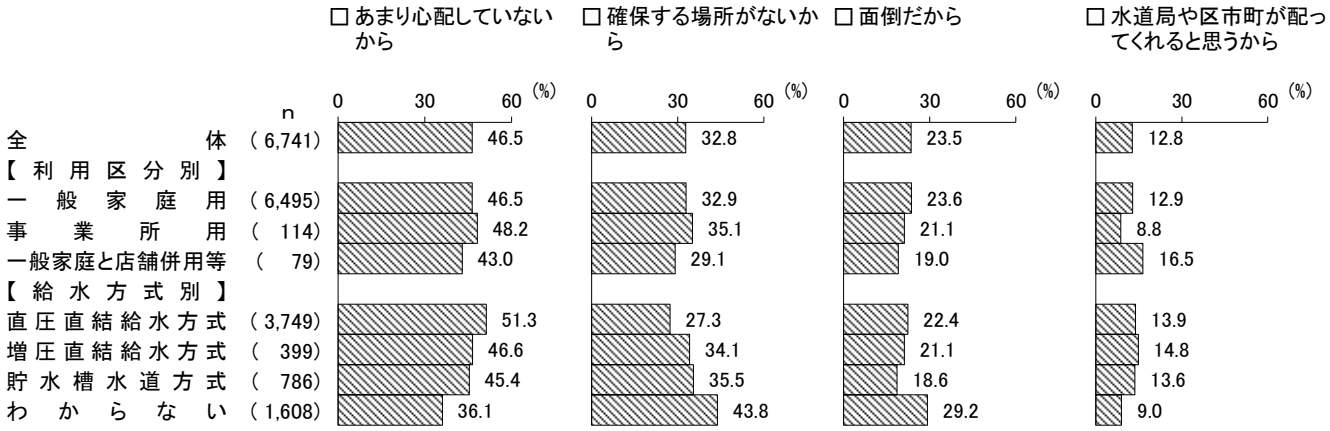
問　〈前問で「４　確保していない」と回答した方のみにお尋ねします。〉
飲料水を確保しない理由は何ですか。（複数回答可）

1）あまり心配していないから　　2）確保する場所がないから
3）面倒だから　　4)水道局や区市町が配ってくれると思うから

〔Ａ：問 13、Ｈ：問 11〕

［調査結果］

①　震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（利用区分別、給水方式別）〈図表２－４－１６〉



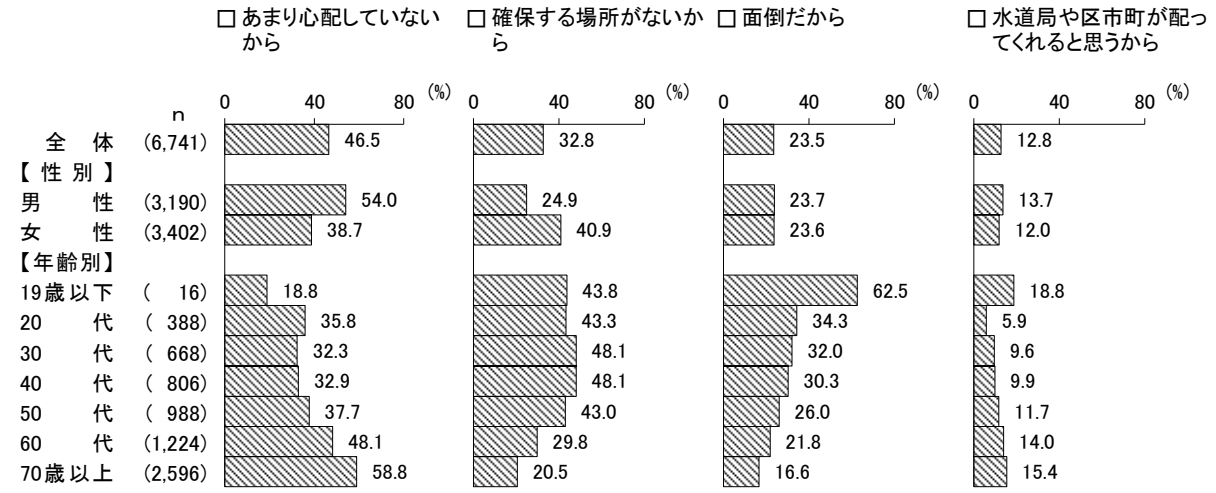
＜特徴＞

○全体では、「あまり心配していないから」が、46.5％で最も高くなっている。以下、「確保する場所がないから」(32.8％)、「面倒だから」(23.5％)、「水道局や区市町が配ってくれると思うから」(12.8％)となっている。

○利用区分別では、「あまり心配していないから」は、事業所用で48.2％と最も高く、「確保する場所がないから」でも、事業所用で35.1％と最も高くなっている。

○給水方式別では、「あまり心配していないから」は、直圧直結給水方式（51.3％）で最も高くなっている。

② 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（性別、年齢別）〈図表２－４－１７〉

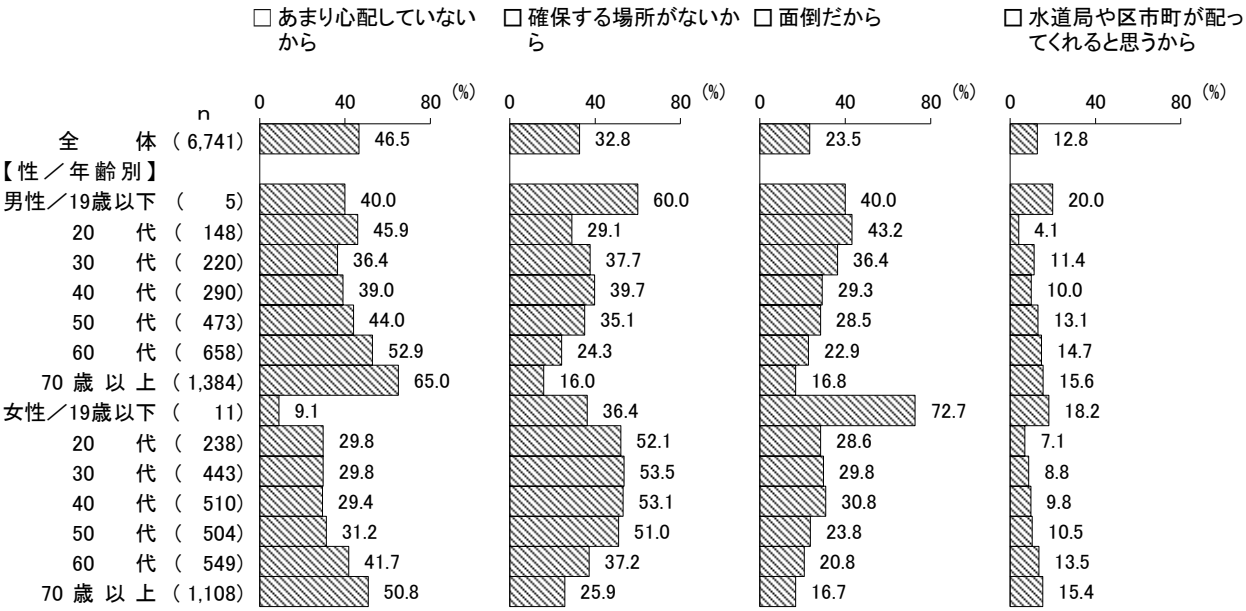


＜特徴＞

○性別では、「あまり心配していないから」は、男性（54.0%）の方が女性（38.7%）より15.3ポイント高く、逆に、「確保する場所がないから」は、女性（40.9%）の方が男性（24.9%）より16.0ポイント高くなっている。

○年齢別では、「あまり心配していないから」は、おおむね年齢が上がるにつれ割合は高くなり、70歳以上（58.8%）で最も高くなっている。「確保する場所がないから」は、50代までは４割台であるが、60代から低くなり、70歳以上（20.5%）で２割となっている。また、「面倒だから」では、年齢が上がるにつれ割合は低くなり、70歳以上で16.6%となっている。

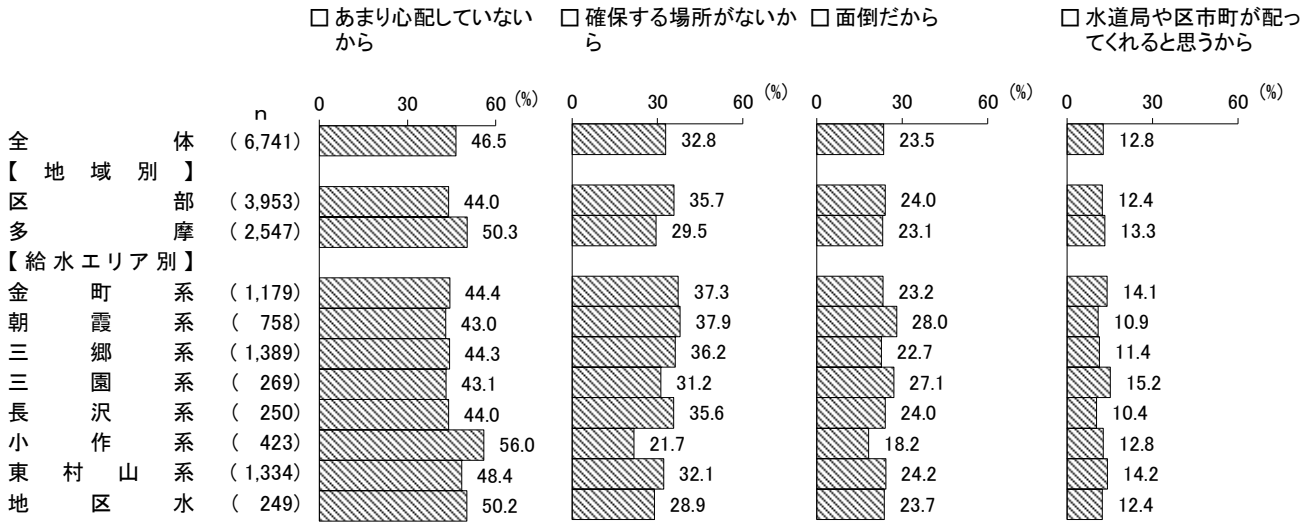
③ 震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（性／年齢別）〈図表２－４－１８〉



＜特徴＞

○性／年齢別では、「あまり心配していないから」は、男性の70歳以上（65.0%）で最も高くなっている。逆に、「確保する場所がないから」は、男性の70歳以上（16.0%）で最も低くなっている。また、「面倒だから」は、男女ともにおおむね年齢が下がるほど割合が高くなっている。

④　震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（地域別、給水エリア別）〈図表２－４－１９〉

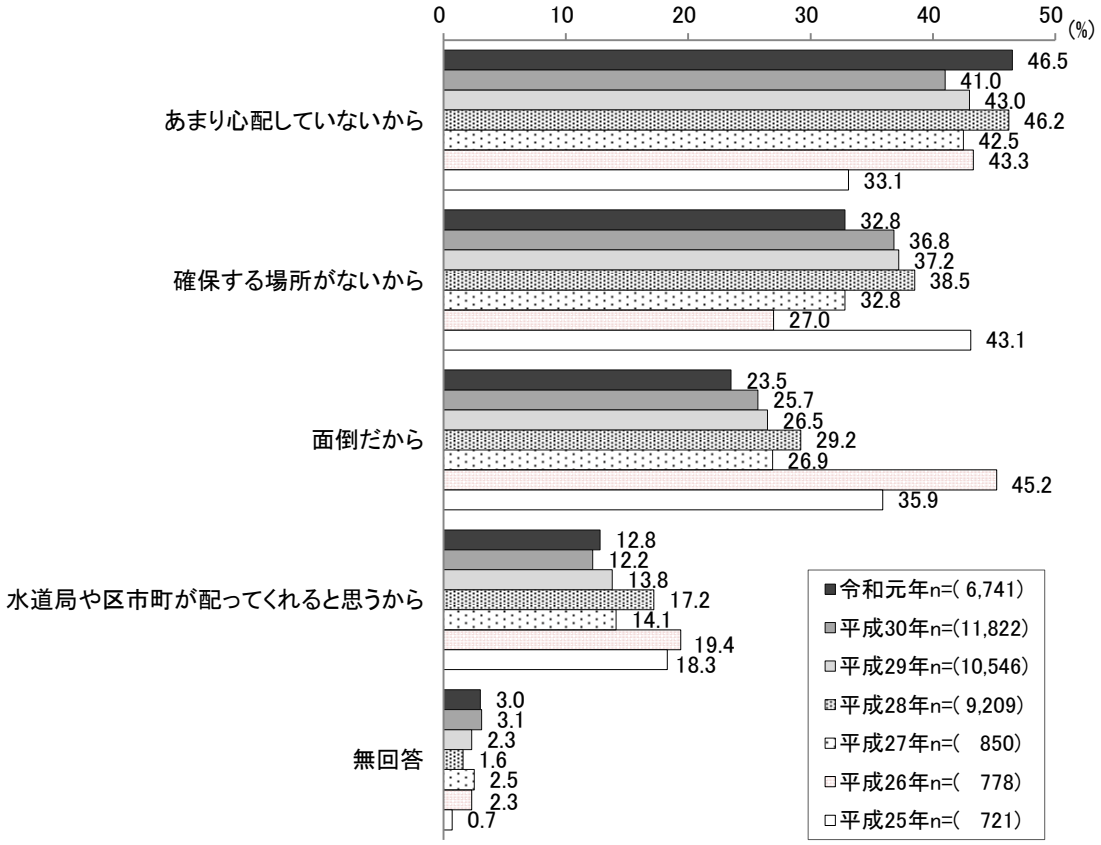


＜特徴＞

○地域別では、「あまり心配していないから」は、多摩（50.3%）の方が区部（44.0%）より6.3ポイント高くなっている。逆に、「確保する場所がないから」は、区部（35.7%）の方が多摩（29.5%）より6.2ポイント高くなっている。

○給水エリア別では、「あまり心配していないから」は、小作系（56.8%）が最も高く、地区水（50.2%）でも５割となっている。「確保する場所がないから」は、朝霞系（37.9%）で最も高く、次いで金町系（37.3%）、三郷系（36.2%）などとなっている。

⑤　震災に備えて「飲料水」を確保していない理由（時系列：全体）〈図表２－４－２０〉



＜特徴＞

○前年度調査との比較では、「あまり心配していないから」は5.5ポイント増加し、逆に「確保する場所がないから」は、4.0ポイント減少している。

平成27年度から令和元年度までの５年間の傾向では、「あまり心配していないから」については、平成28年度以降は４割台で特に大きな変動はないが、「確保する場所がないから」、「面倒だから」、「水道局や区市町が配ってくれると思うから」については、割合がおおむね減少している。

（５）最寄りの災害時給水ステーションの認知度

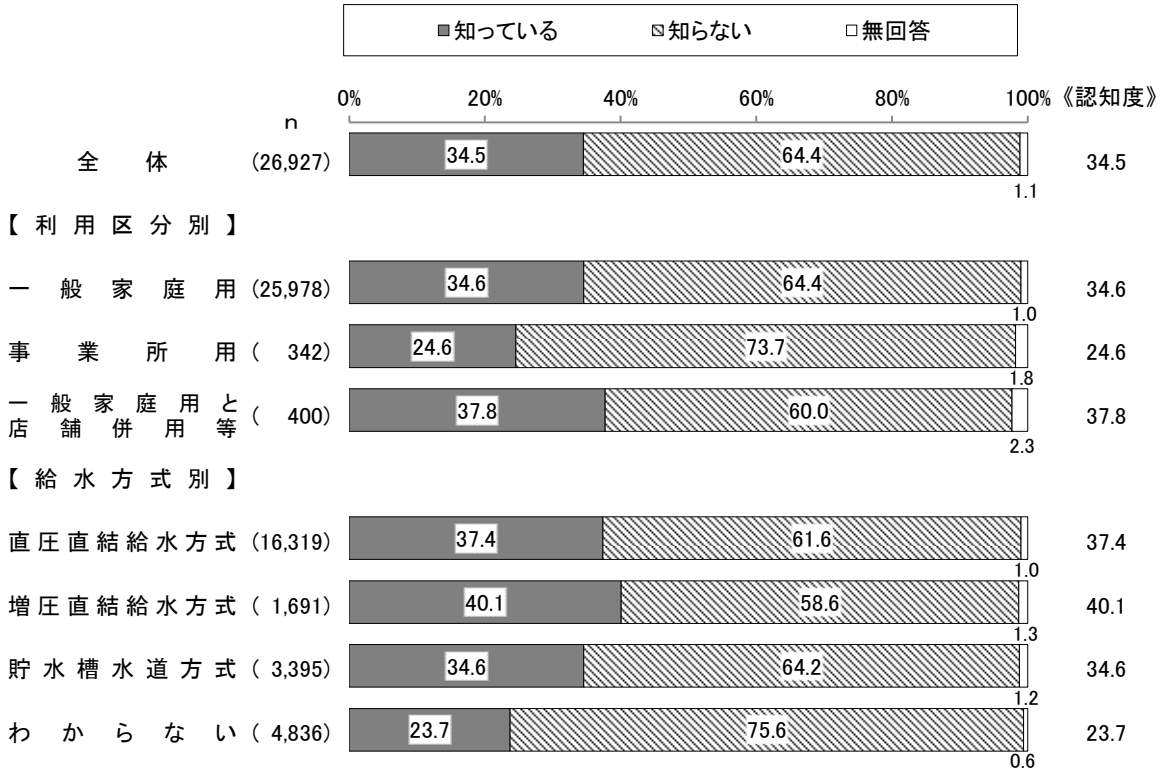
問　最寄りの災害時給水ステーション（給水拠点※）をご存じですか。
※給水拠点　地震等が発生し、断水になった時、公園や浄水場・給水所などで応急給水を受けることができる場所。

1）知っている　　2)知らない

〔Ｂ：問 11、Ｆ：問 11〕

［調査結果］

①　最寄りの災害時給水ステーションの認知度（利用区分別、給水方式別）〈図表２－４－２１〉



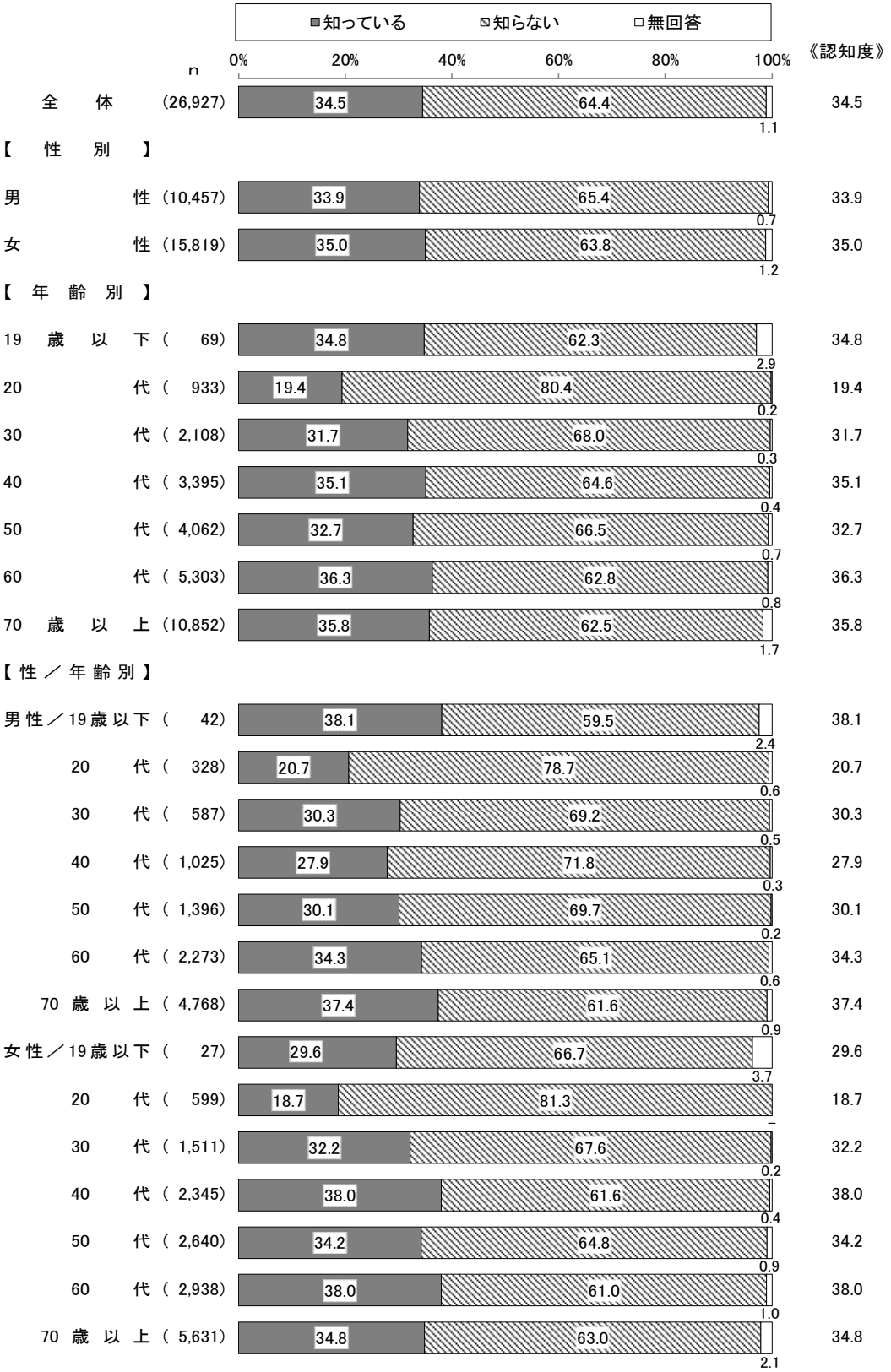
＜特徴＞

○全体でみると、「知っている」は34.5％で、「知らない」が64.4％となっている。

○利用区分別では、「知っている」は、一般家庭用と店舗併用等で37.8％と最も高くなっている。

○給水方式別では、「知っている」は、増圧直結給水方式で40.1％と最も高くなっている。

② 最寄りの災害時給水ステーションの認知度（属性別）〈図表２－４－２２〉



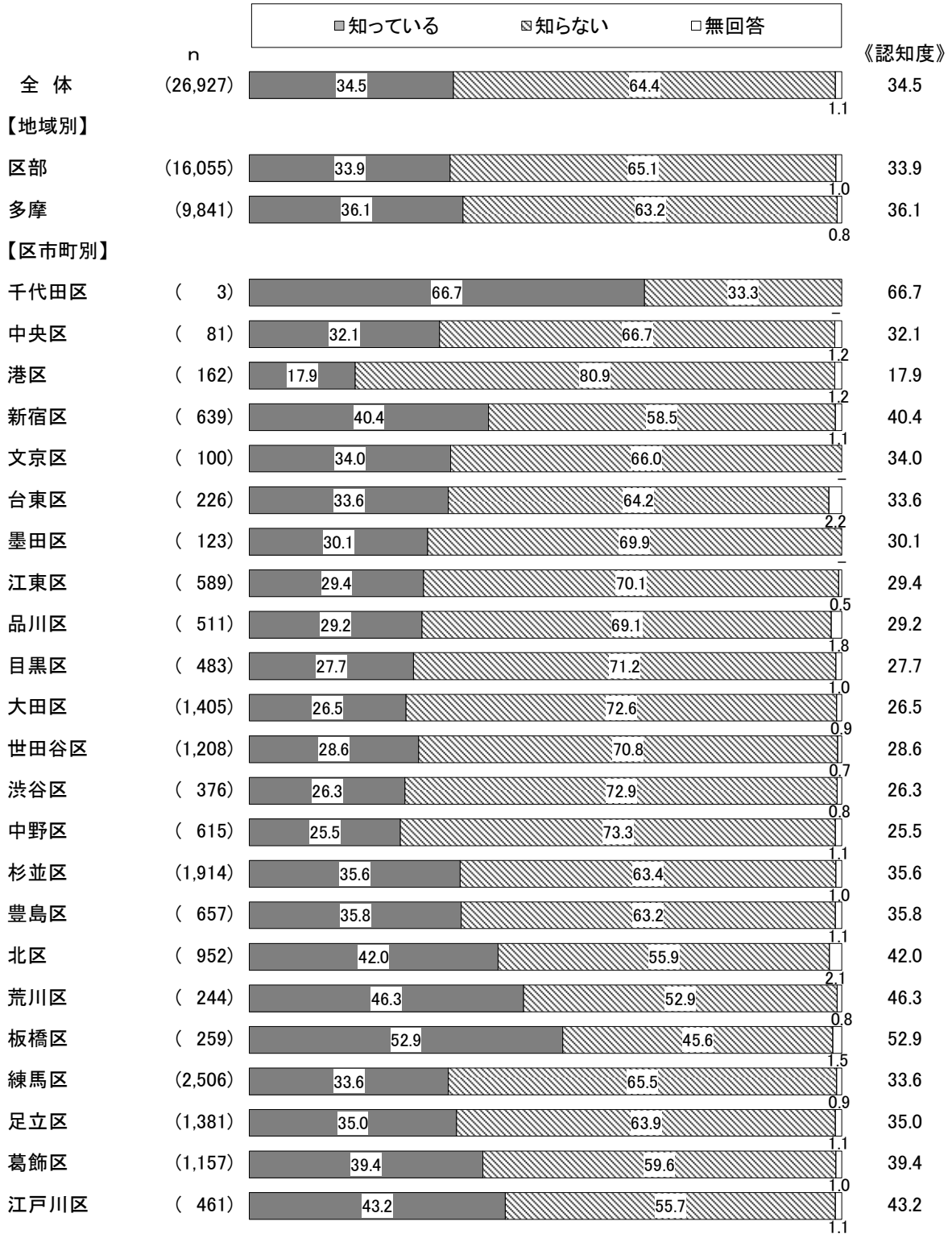
＜特徴＞

○性別では、特に大きな違いはみられない。

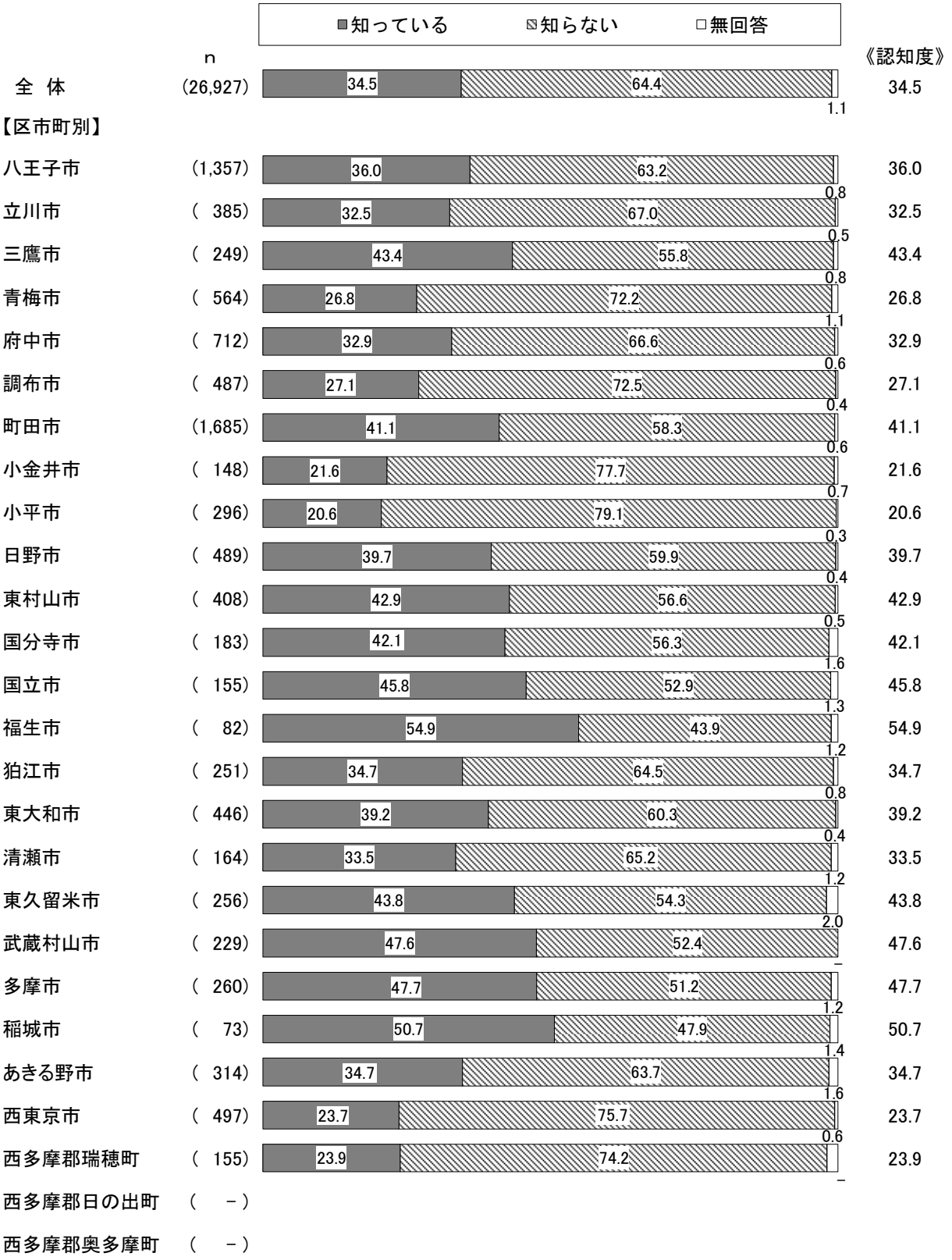
○年齢別では、「知っている」は、20代（19.4%）が２割弱で最も低くなっているが、その他の年代はすべて３割台で、60代（36.3%）が最も高くなっている。

○性／年齢別では、「知っている」は、女性の40代と60代がともに38.0%で最も高く、女性の20代（18.7%）が最も低くなっている。

③　最寄りの災害時給水ステーションの認知度（地域別、区市町別）〈図表２－４－２３〉



③　最寄りの災害時給水ステーションの認知度（地域別、区市町別）〈図表２－４－２４〉

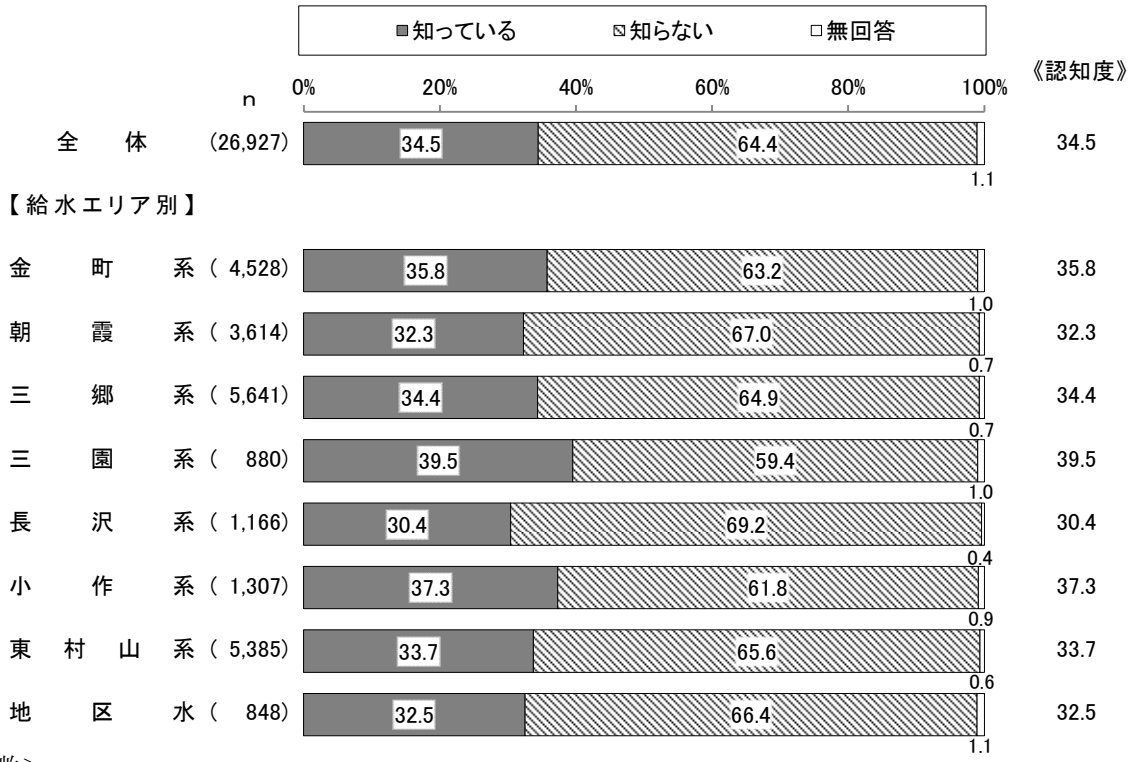


＜特徴＞

○地域別では、特に大きな違いはみられない。

○区市町別にみると、「知っている」は、標本数の少ない千代田区を除き、福生市が54.9％で最も高く、次いで、板橋区（52.9％）と稲城市（50.7％）で５割台となっている。

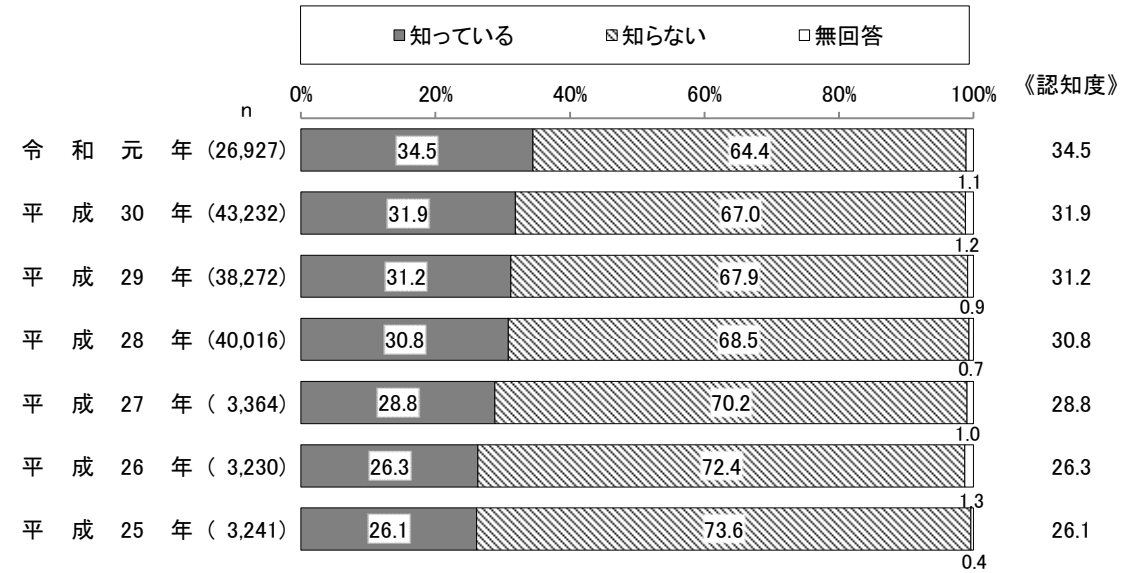
④　最寄りの災害時給水ステーションの認知度（給水エリア別）〈図表２－４－２５〉



＜特徴＞

○給水エリア別では、「知っている」は、三園系（39.5%）が最も高く、長沢系（30.4%）で最も低くなっている。

⑤　最寄りの災害時給水ステーションの認知度（時系列：全体）〈図表２－４－２６〉



＜特徴＞

○前年度調査との比較では、特に大きな違いはみられない。

平成27年度から令和元年度までの５年間の傾向をみると、《認知度》は少しずつ増加しており、平成27年度（28.8%）に比較して令和元年度（34.5%）は5.7ポイントの増加となっている。